

**館野** ● その意味で楽器にはこだわりません。むしろ、どこへいっても与えられた楽器でやるのが演奏家だと思っています。

**樋口** ● いや、素晴らしいですね。

これは脳科学と関連した質問になるかもしれませんが、私たち非常に不思議なのは、ほとんど暗譜されますよね。よく、何十曲も暗譜されるというのは、たとえば、頭のなかで楽譜があつて、その楽譜を思い浮かべながら演奏されるのか、そんなものはまったくなく、ある意味では、指が覚えているというようなものなのでしょうか。すごく不思議です。そのあたりはどうなのでしょう。

**館野** ● 楽譜といつても細かいのがみえるわけではありません。だいたい楽譜のこのページ、このあたりだとか、それで次へ移つてというイメージはありますね。それから、手の動きでということももちろんあります。いろいろなことが関係しています。

**樋口** ● 耳と目を通して楽譜を、そして指の動きとかを総合したものというように……。

**館野** ● そうです。自分は練習をするとき、たとえば、まったくみえない状態を想像して、目をつぶつて弾くとかで感覚をつかむ。

**樋口** ● 感覚を研ぎ澄ますというか……。

**館野** ● それもあるんです。でも、現代物の厄介なのは、もう覚えられませんよ。それは大変です。そういうものは暗譜で弾く人も少ないですよ、いまはね。

**樋口** ● そうですか。さきほどから、何回か話ができませんでした。六五歳のときですか？

**館野** ● はいはい。脳出血ですね。

**樋口** ● 右手も使えなくなつたときは、おそらく落ち込まれたり、絶望感のようなものを感じられたんじゃないかと思いますが、その二年後に、左手でやろう、と思われるのに、どんなプロセスが。

**館野** ● いろいろな人から同じ質問は何百回、何千回と聞かれて……。じつをいうと、絶望感とか失望しちゃつた、なにができないということ、なにもなかつたんです。

**樋口** ● はあ。

**館野** ● 失望感とか、なにをしたらいいんだろうとか、これからなにをやつていけばいいんだろうとかいうことは、ほとんどなかつたです。一生懸命動くようにリハビリをして練習するとかもしなかつたんです。

